

地域研究コンソーシアム(JCAS)オンデマンドセミナー

企画責任者: 篠崎香織(北九州市立大学/日本マレーシア学会)

シンポジウム

「混成アジア映画がつなぐ東アジア世界: 『Fly Me to Minami～恋するミナミ』が照らす世界」

- ◆2013年12月13日(金)18:30～20:30
- ◆大阪大学中之島センター講義室301(参加者25名)
- ◆パネリスト

ゲストスピーカー: リム・カーワイ(『恋するミナミ』監督)

話題提供: 西村正男(関西学院大学)「内なるアジア/外なるアジア: リム・カーワイ監督の無国籍映画から」
宮原暁(大阪大学)「『恋するミナミ』を読む地図: 人の混成と心の混成」



(パネリスト: 左からリム監督、西村氏、宮原氏)

グローバル化の進展に伴い、自己実現の手段として国境を越える人がますます増えている。共同体の境界線は緩やかになり、社会は混成化しつつある。こうした混成性に積極的に目を向け、新たな価値が創出される契機を見出そうとする「混成アジア映画」が、東南アジアや日本の映画人を中心に制作され、世界的な評価を得ている。

本シンポジウムでは、日本・大阪ミナミと韓国・ソウル、中国・香港とをつなぐ『Fly Me to Minami～恋するミナミ』を混成アジア映画ととらえ、同作品を通じて混成性を高めつつある東アジアの今日的な状況をとらえるとともに、同作品が混成性を通じて照らし出そうとする世界に迫った。

リム監督には2つの話題提供を受けてコメントをいただいた。西村氏は映画を通じて中華世界の文化的多様性を示し、それがシンガポール・マレーシア地域で重層的に交差する様相を紹介した。宮原氏は近代の産物としての恋愛と、血統的・文化的混血者の内なる混成性がもたらす葛藤と可能性をテーマとした。これを受けてリム監督より、東南アジアの多文化社会で育った自らに内在する中華が混血的であることが紹介されたうえで、新たな価値を生み出すのは「純血」の文化とは限らないこと、純血と混血という見方そのものに限界があることが示された。

主催: マレーシア映画文化研究会、京都大学地域研究統合情報センター

共催: 大阪大学グローバルコラボレーションセンター、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」